被災動物の声に、耳をかたむけて欲しい。ひとつでも多くの命を救うために。

警戒区域から避難した獣医師が語る。震災直後～救護活動。

人と人、人と動物との絆がなければなしえなかった、"助けたい"のキモチ。

震災当時を振り返る

入院中の動物達を残し、避難するしかなかった現実。

「なんだこの揺れは、これはまずいぞ」2011年3月11日、診療中に起こった大きな揺れは、多くの災いをもたらしました。

渡邉「皆が悲鳴をあげながら避難するのを横目に、必死で棚を抑えていましたが、立っていられなくなって外へ避難しました。空は真っ暗、みぞれが降りだし、雷が鳴り、この世の終わりかと思う程でした。」

その後先生は、入院中の動物達が心配で、ひとまず病院へ戻りました。

渡邉「道中、津波で打ち上げられた、たくさんの民家や車を目にしました。なんとか病院に着き入院中の子の無事を確認し、食事だけを与え、すぐに戻れるという思いで動物達を残し、指示されるがまま避難しました。」

その後原発の水素爆発があり、避難先を何度も変え、三春へ避難してきたそうです。

平尾「地震のすさまじさを改めて思い知らされます。病院に残してきた子たちのことが心配でならなかったのではないですか？」

渡邉「避難先を転々としていた時は、正直動物達の事を想う余裕はありませんでした。避難の直前、娘からは、わが家で飼っていた妊娠中の犬だけでもどうしても連れて行きたいと強く頼まれましたが、入院中の他の動物を差し置く事は、獣医師として出来ませんでした。」

平尾「とても複雑な思いですね。」

渡邉「日時が経過するうちに残してきた動物達の事が頭から離れず、救助を決断しました。近隣の先生から借りたわずかなケージ、数本のペットボトルの水を車に積み、区域内の状況もまったく不明な中、辞世の句を詠み、決死の覚悟で病院に戻りました。」

渡邉「入院中の犬のうち、残念ながら5頭が亡くなっていました。飼い主さんと亡くなった犬達に対し、本当に申し訳ない気持ちでいっぱいでした。しかし、帝王切開予定のお腹の中にいたフレンチブルの仔が奇跡的に産まれていたんです。思わず涙があふれてしまいました。」

やるせない気持ちと、安堵の気持ちが入りまじった、なんとも言いがたい感情だったそうです。その後、先生は病院と避難先を何度も往復し、なんとか動物達を運び出しました。

避難所で困っている飼い主さんと犬・猫達を助ける為に。

平尾「無事救出できた子達と共に、避難生活を続けていたんですね。他にも先生と同じように、同行避難された方々はいらっしゃったのでしょうか。」

渡邉「同行避難した方はほんの一部でしたが、小学校や公民館などの避難所を訪れた時に、「先生、避難所に犬を連れて住めないんです。他の人の迷惑になりそうで…。」という悩みをたくさん聞きました。中には車の中にペットシーツを敷いて飼っている方もいらっしゃいました。飼い主さんはもちろん、犬や猫もつらい思いをしているだろうと、そういう悩みをかかえている方のペットを預かるようになりました。」

平尾「そのことが私設シェルターの始まりになったんですね。」

渡邉「私設シェルターを始めて物資が何も無かった時、2千人以上の避難所となっていたビッグパレットという施設に、軽トラック一台分ぐらいの荷物が届いたんです。私の願いを聞きつけて、群馬県獣医師会の先生方始め、他県の有志が持ってきてくれたケージとフードでした。いやー、人と人、人と犬との絆をその時ほど感じたことは無く、今でもそれらのケージを見るとその時の感動・感謝の気持ちが甦ります。」

一時的な避難所だった、私設シェルター。

❶避難時の国道288号。地面は割れ、陸橋が倒壊。❷震災直後、病院内の犬舎。❸震災直後の院内処理室。❹渡邉先生の飼い犬である母犬と、奇跡的に産まれた仔犬。

東日本大震災から1年以上が過ぎ、被災各地で復興が進む一方で、少しずつではありますが、風化の兆しを感じずにはいられません。そのなかで今なお様々な問題をかかえている福島。私達ができることは、しっかりと自分達の目で被災地を知り、被災した動物がどのような毎日を過ごしているかを、ペピイをご覧のみなさまにお伝えする事だと思いました。そこで今回は、福島の三春町にある被災動物保護シェルターの管理獣医師として、毎日犬や猫と向き合っている、渡邉先生にお話をお聞きしてきました。

（2012年6月18日 三春シェルターにて）

（左）三春シェルター管理獣医師 渡邉正道先生：富岡町で20年以上動物病院を経営。被災後の現在は、獣医師でもある奥様の三智子さんと郡山で病院を再開、二足のわらじで三春シェルター管理獣医師としても活動している。
（右）ペピイ事業部 事業部長 平尾 泰久

福島県の動物救護の流れ

2011

- 3/11 東日本大震災発生
- 3/12 福島第一原発で事故発生 国による避難命令
- 3/14 緊急災害時動物救援本部立ち上げ
- 3/23 福島県獣医師会により被災ペット救済支援センター設置
- 4/15 福島県動物救護本部設置 避難所への物資支援
- 4/19 義援金募集開始
- 4/25 福島市内に仮設の被災動物収容施設を設置
- 4/27 第一シェルター（飯野）開設
- 5/10 一時帰宅開始 環境省、福島県による警戒区域内にて被災動物の保護開始
- 10/1 第二シェルター（三春）開設

警戒区域内の犬・猫の被災状況

※2011年末時点

震災前：約10,000頭の犬・猫が生活していたと見られる。

地震および津波で死亡	約2,500頭
同行避難	約 300頭
ボランティアによる保護	約2,000頭
その後、餓死や衰弱死	約4,000頭
行政により保護された頭数	約 600頭

まだ警戒区域内にいるとされている頭数は400頭前後と見られている。

第2シェルター開設に込められた想い

被災動物への想い、飼い主さんへの想いがたくさんつまった、三春シェルター開設。

被災動物への想いを共有できる仲間と共に、未来を考える。

大混乱の最中、福島では幾度もの会議が行われ、被災動物への活動が本格化したのは、4月15日の「福島県動物救護本部」が設置されてからでした。その後4月27日、第1号の〝飯野シェルター〟が開設。しかし100頭以上の犬・猫を数名の県の担当者とボランティアで世話しなければならない状況の中、保護された子たちの傷ついた心までケアしてあげることの難しさを職員たちは感じていました。そこで被災動物の譲渡や一時預かりの拠点としての機能を持ち、心のケアもできる、環境の整った第2シェルターが必要になってきたのです。

渡邉「私達夫婦が互いに獣医師である事、被災者である事、そして私設シェルターとして被災した動物達を管理していた事から、第2シェルターの立ち上げに関係することになりました。まずは候補地探しから始まり、福島県と獣医師会、民間企業の尽力によって、10月に三春シェルター開設という運びになりました。」

第2シェルターである、三春シェルター。

シェルターで働くスタッフを、9月初頭から募集開始。9名の勇士が集まり、そこから三春シェルターの活動が始まりました。

平尾「当初はどんな想いでお話を受けたのですか?」

渡邉「とにかく警戒区域内の動物達をなんとかしたかった。でもひとりでは何もできない。同じ想いをかかえている人たちと手をとりあって解決していこうと思ったんです。当初スタッフ9名の内、7名は同じ被災者でした。」

平尾「同じ震災を経験し、被災動物への想いを共有できる仲間と共に、人と動物両方の未来を考えていたんですね。」

朝から夕方まで懸命に、被災した犬・猫達の為に頑張るボランティアスタッフの方々。少しの休憩時間でも、犬・猫達に対する想いを話されていました。

犬舎・猫舎の中に、ちぎった新聞紙をペットシーツの代わりに入れます。ボランティアスタッフの方々が大量に作成されていました。

三春シェルターで過ごす、犬・猫達は今…。

平尾「三春シェルターの犬・猫達は、徐々にですが元気を取り戻しているように見えます。先生やスタッフさんにもすごくなついていますよね。」

渡邉「そもそものコンセプトとして、できるだけ元の生活に近づけてあげて、心のケアをする事を目的としています。精一杯愛情を注いでいるつもりですが、それでもたくさんの犬・猫達を、限られた時間で充分に診てあげることは今でもできていません。」

STORY

我が子を想うがための、苦渋の決断。

福島の震災を経験した、ある飼い主さんの話です。
被災地から一緒に逃げる事ができず、離ればなれになった愛犬を、
くる日もくる日も、ずっと探していました。そんなある日の事。
奇跡的にも民間の保護団体に保護され、里親に迎えられた事を知った
飼い主さんは、いてもたってもいられず、愛犬に逢いに行ったそうです。
しかし、ぴょんぴょん跳ねて遊んでいる幸せそうな姿を遠巻きにみて、
「この子の為を思うなら…」という気持ちで、引き取らずに戻ってきたそうです。

避難生活を続けている飼い主さんは、愛犬と一緒に生活したくても、
充分に時間を割いてあげれなかったり、一緒に生活をしづらい状況で
様々な想いがあるのだと、改めて考えさせられました。

平尾「そういう意味でも、ボランティアさんの協力は頼もしい限りですね。」

渡邉「はい、ボランティアさん無くしては犬・猫達の心のケアはここまでできていないと思います。たくさんのスタッフ・ボランティアさんに支えられながらここまできました。でもね、最近シェルターの犬を見ていて、〝パッ〟と気づかされる事があるんです。」

平尾「先生でも、気づかされる事が?」

渡邉「ええ、たくさんありますよ。例えば、飼い主さんが面会に来られた時のことです。その時の犬達の喜び方は、私達に見せる喜び方ではないんです。身体全体で表現するというか…。やっぱり違うんだなぁと思いますね。その後、飼い主さんが帰っていく姿を見送る犬達の表情は、悲しそうで、とてもつらそうに見えます。そういうシーンを見るたび、とにかく元気で健康な状態で、飼い主さんの元へ還してやらなければと強く責任を感じますね。」

被災動物への心境の変化と、この先の三春シェルターのあり方

いまいちど、被災動物への想いを考える。そして、その想いを風化させない為に。

飼い主さんと被災した動物、それぞれのしあわせのために。

平尾「この三春シェルターの、今後について、どのようにお考えですか?」

渡邉「最近になって、スタッフ含め心境に大きな変化があります。当時は〝飼い主さんが引き取れるようになるまで、いつまででも預かろう〟という考えでしたが、人間目線なのではと想うようになりました。このままシェルターでいつ元の生活に戻れるか分からない状態で、この子達を待たせるのはどうなのだろうと。「この子のために手放して、里親に出しましょう」とは、言いづらいですが、それでもシェルターは変わっていかなければならない時期だと感じています。」

平尾「シェルターの犬・猫と向き合い続けてきた、先生やスタッフさんだからこその、ひとつの答えなんでしょうね。」

渡邉「そうですね。たくさんの愛情を感じさせてあげたいです。それが被災した動物にとって最大の癒しになるはずだと思います。」

平尾「これまで、里親として名乗り出られた方は、たくさんいらっしゃったのですか?」

渡邉「おかげさまで、たくさんの里親さんが迎えにきていますよ。本当に感謝してます。」

平尾「里親さんの温かさに救われながらも、やはり一緒に過ごしたくても過ごせない飼い主さんの為には、被災地である福島をできるだけ早く元の姿に、人と動物が共存できる姿に戻したいですね。」

渡邉「私も本当にそう思います。震災後間もない頃は、避難所で飼えない方の為に、個人的に犬・猫達を預かったりしていましたが、今の三春シェルターでは警戒区域内で保護された動物たちのみ預かっています。避難生活が長期化し、厳しい環境の中、懸命に同行避難してきた子の世話をしている飼い主さんもたくさんいます。そんな方たちのお役に立ちたいのですが、それができるだけの人、モノ、資金が足りていません。ですがゆくゆくは、このシェルターを〝動物愛護センター〟にして、動物愛護を推進する活動をしていきたいという願いがあります。」

平尾「震災から1年以上が経過した今なお、日々動物達の為に活動を続けている先生方のことを忘れてはいけないと、改めて強く感じました。これからも精一杯の支援を続けさせていただきます。最後に読者の皆様へのメッセージをお聞かせください。」

渡邉「私は約20年、獣医師として、たくさんの犬、猫、飼い主さんにささえられながら生きてきました。その数だけ〝絆〟があります。みなさんも、共に暮らす動物達との絆を大切にしてください。シェルターは当初〝保護〟することが主な目的でした。次に〝管理〟をすることが大切になり、今は生涯のパートナーと固い絆で結ばれた、本当の幸せを享受できるようサポートする時期に。皆様からいただいたご支援を無駄にしないためにも、ここに居る子達に一日も早くそんな〝幸せ〟を感じさせてあげたいと願います。」

～取材を終えて ペピイより～

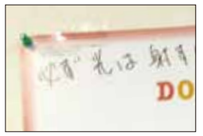
渡邉先生ご自身も、現在避難生活を送りながら、シェルターに勤務されています。先生の元には震災前から診ていた子の相談に来られる方も多いそうで、「私達を頼ってくれる双葉郡の被災者がいる」という理由から、獣医師の奥様と今年3月に動物病院を開業されました。朝から夕方まではシェルター、夕方からは病院と、まさに朝から晩まで働きづめの毎日を送られています。

「今の病院はあくまで仮設。絶対にいつの日か富岡町に帰る!」と断言する渡邉先生の言葉に、明日への希望を持ち続ける地元の方の熱い想いを感じました。

多忙な中、快くインタビューに応じてくださった先生のお話からは、これまで獣医師として自分を生かしてくれた犬猫達、自分を慕ってくれる飼い主さんへの感謝の思いがひしひしと伝わってきて、「今こそ恩返しがしたい」という気持ちが、多忙な現場でがんばれる原動力になられているようにも感じました。

しかし先が見えない不安の中、心が折れそうになることもあり、そんな時はカレンダーに書き込んだ自分への応援メッセージを見て、気持ちを入れ替えているそうです。

愚直なまでに誠実な先生のお話を聞き、改めて自分達もできることをしなければと感じました。ペピイは、みんなが前を向いて進んでいけるようになる日まで、支えあい励ましあいながら、動物達のため飼い主さんのために日々奮闘している福島県の動物救護活動を、これからも応援してまいります。



診察室の壁に貼られているポスターには、復興への気持ちが込められたメッセージが。

福島応援企画

福島の動物救護活動は
まだまだ支援を必要としています。
今私たちができることは、
一人一人の小さな力をたくさん集めて、
現地にお届けすることだと考えています。

全国の飼い主様の優しさを、被災地へ届けましょう!

ペピイでは全国の飼い主様といっしょに、福島を応援できる企画を行っております。皆様からお寄せいただいた支援を福島県動物救護本部へお届けし、福島のシェルター運営、譲渡支援、愛護センター設立資金として活用されます。

●ポイント募金による支援

お買い上げ100円につき1ポイントたまる「ペピイわくわくポイント」を1ポイント=1円で寄付できます。ペピイホームページにて受け付けしておりますので、詳細はペピイウェブサイトをご確認ください。

ペピイ 検索 www.peppynet.com/camp/tohoku_bokin/

●ドライフードお買い上げによる支援

いつもの"ごはん"をペピイでお買い上げいただくことで、
1個につき10円をペピイから寄付させていただきます。

実施期間:2013年3月31日ご注文分まで
対象商品:すべてのドライフード(P.130～148掲載)

ボランティア、里親募集、義援金についてはこちらまで。

●福島県動物救護本部
www.pref.fukushima.jp/eisei/saigai/kyuugoindex.htm